

第7章

和解プロセスにおける歴史的知識の生成と普及：
スウェーデン国教会とサーミ人

Generating and popularizing historical knowledge in a reconciliation process: the case of the
Church of Sweden and the Sami

担当：川口広美（広島大学大学院人間社会科学研究科）

hkawaguchi@hiroshima-u.ac.jp

■著者情報

名前：Björn Norlin <https://www.umu.se/en/staff/bjorn-norlin/>

・略歴：スウェーデン Umeå University で History and Education at Umeå School of Education の准教授を務める。大学院の教員養成課程の副校長、Nordic Journal of Educational History (NJEDH)の編集者。研究テーマは、教育史、歴史教育とニューメディア、概念的・空間的歴史、サーミ研究。主に、教育と暴力の歴史、現代の和解過程における歴史と教育史の役割に関して関心がある。

・有名な書籍や文献：

Norlin, B. (2020). Comenius, moral and pious education, and the why, when and how of school discipline. *History of Education*, 49(3), 287-312.

Norlin, B. (2016). School jailhouse: discipline, space and the materiality of school morale in early-modern Sweden. *History of Education*, 45(3), 263-284.

名前：Daniel Lindmark <https://www.umu.se/en/staff/daniel-lindmark/>

・略歴：スウェーデン Umeå University で Church History at the Faculty of Arts (50 %) と History and Education at Umeå School of Education (50 %)の両専攻で教授を務める。研究テーマは、教育史、印刷文化、大衆宗教、歴史文化、サーミ研究。北欧の宗教史研究ネットワークのコーディネータを務める。2012年から2017年にかけては、「スウェーデン国教会とサーミの白書」（スウェーデン国教会の資金援助）を担当。このプロジェクトと並行して、研究プロジェクト「サーミの声と教会」や「教会とサーミの和解プロセスにおける歴史の利用」にも関わっている。

・有名な書籍や文献

Lindmark, D. (2013). Colonial encounter in early modern Sápmi. In *Scandinavian Colonialism and the Rise of Modernity* (pp. 131-146). Springer, New York, NY.

Lindmark, D. (2015). Educational history in the Nordic region: Reflections from a Swedish perspective. *Espacio, Tiempo y Educación*, 2(2), 7-22.

※今回の著者2名は、本章で取り上げる白書プロジェクトのメンバー。

■重要用語

- ・Truth and Reconciliation Commissions(TRCs):真実和解委員会
- ・Educationalization:教育化
- ・Recontextualization:再文脈化

■議題

1. メディア・コンバージェンスを前提とすると、「歴史和解」とは何か?何をめざすことになるのか?
2. (今回は中心ではなかった)学校教育における「教育化」の特徴は何か?:第3段階の他の一般化の特徴と比べての違い

■ まとめ

1. はじめに

(前提)

- ・真実和解委員会 (TRC) の教育的機能
- 一般市民への歴史的知識を普及させる役割 (例: 南アフリカ、カナダ)
- ・「スウェーデン国教会とサーミ人: 白書プロジェクト」(2012-2017) ※今回の主プロジェクト
- 知識の生産と文書化がテーマであり、アウトリーチとしては限定的であったが、多くの一般公開活動を行っていた
- 2011年にサーミ人との和解プロジェクトの一環で、サーミの代表者から求められたことが経緯。

(目的)

- ・現代の和解プロセスにおける歴史的知識の役割と形態、教育プロジェクトとしての白書の理論化、商大の学術対話に向けて、より深い理解を図ること
- 執筆者の2名が参加者としての個々の経験の振り返り+白書とTRCに関するより一般的な分析

(RQs)

- ・イデオロギー的アジェンダに基づいて推進する和解プロセスにおいて、歴史問題が定式化・学術研究・出版される際に、歴史的知識にどのような変化があるか?
- ・白書プロジェクトには定式的なプロセスがあり得るのか? そうであれば、多様な教育的条件や目的をどのように定義し、関連付けられるか?
- ・そうしたプロセスは、どのように理論的な視点から分析できそうか?

2. 理論と概念: 歴史知識を生成・調停 (mediate) ・再調停 (remediate) すること

(分析枠組み)

- ①教育化 (educationalisation) (Keynes et al. 2021): 現代の社会問題・政治問題が、教育的教育言説へと再帰的に変換されること
- ②再文脈化 (recontextualisation) (Arvidsson et al., 2021): 白書で書かれた知識が、制度化された教育や教育目的にあわせてどのように調整されたか
→政治問題・社会問題が、教育的な形でどのように再梱包されたか? 異なる文脈に応じて、どのように形態を変えるか?
- ③メディア・アフォーダンス、再調停、メディア・コンバージェンス:
 - ・異なるアフォーダンスを持つ多様なメディア内で、再構成 (再調停) されている
 - ・デジタル技術と通信技術の発展により、新聞、テレビ、インターネットなど異なる形態・コンテンツメディアが1つに融合する「メディア・コンバージェンス」が可能
 - 多様なアクター、異なる教育文脈、メディアジャンル、オーディエンスが発生

⇒ 全体的な教育事業としての和解プロセスに影響を及ぼすことになる

(分析視点の独自性)

- (1) 多くの主体に配慮している:メディア・複雑なコンテキスト
- (2) プロジェクトの特定の側面ではなく、全体的なプロセスを検討
- (3) 教育化の枠が学校教育や子どもの学習ではなく、公共メディアなどの成人の学習プロセス中心
- (4) 学習成果ではなく教育的な条件に注目

3. 現代コンフリクトに関連した歴史問題の定式化(第1段階)

- ・TRC や白書: 純粋学術活動になることはあり得ない
 - ⇒ 政治・イデオロギー・道徳的考察を反映し、現代問題の解決に寄与すること
 - ⇒ 多様な利害関係者の利益を反映した幅広い期待を伴う
- ・サーミ人とスウェーデン国教会の関係
 - ・和解のアジェンダはコンセンサス志向 (consensus-oriented)
- ・白書プロジェクトの歴史: 1990年代初頭に始まった和解プロセスの一部
 - ⇒ 世界の先住民に対する西洋の教会の役割に批判的な視点
 - ⇒ この影響を受け、1990年代からスウェーデン国教会内にサーミ評議会が設立
- ・2006年~: サーミの問題に関する報告書を発表
- ・2011年: サーミの代表者がスウェーデン国教会に対し、過去の過ちを問う公聴会が開催された
- ・2012~2018年: 白書プロジェクト
 - ⇒ 2016年: 学術アンソロジー、2017年: 一般向け報告書、2018年: 英語版が出版
 - ⇒ 請け負ったのが Umeå University
- ・2019年: サーミ人の人骨送還と再埋葬式
- ・白書プロジェクトの性格
 - ・目的: 歴史虐待を特定する+文字言語の発達などの肯定的な貢献に対しても言及することを意図
 - ・運営グループ: サーミ人と教会の代表によって構成
 - ⇒ 非学術的な用語が多発+現在主義的な尺度で評価された
 - (例) offensive treatment, coercion, oppression, discrimination, racism
 - ・プロジェクトの際には、学術的側面を押し出すことが重視されたが、依然として非学術的な影響が強かった

4. 科学的知識の正式:アカデミック・アンソロジー(第2段階)

- ・白書プロジェクト:学術研究団体に置かれ、大学教授が主導した
 - ⇒学術的な色が強くなった
 - 例) 運営グループ:7名中4名が研究者
- ・運営グループの最初の仕事
 - (1) 時代的拡張:中世のサーミとキリスト教の出会い⇒現代
 - (2) 地理的拡張:ノルウェーとフィンランドも含む
 - ⇒本格的な学術研究プロジェクトへと発展した
 - ⇒「歴史正義」「和解」に関する研究は、学術研究として拡張することにつながった
- ・学術報告書:33名の著者の内、著名な研究者によって執筆
 - ⇒プロジェクトリーダー:高い学術的水準を維持することのみを要求(高い自律性を担保)
 - ⇒現在的問題は最終章のみに記載(それ以外は、学術的な議論を行う)
- ・学術的な研究+行動を喚起することのイデオロギー的テキストは明確に分離
 - ⇒一般向けの要約も1部は学術報告書の要約、2部は「和解の展望」を提示する

5. 知の公共化:成果の統合と普及(第3段階)

- ・どのようにしたら、特定の学問領域で「承認された」知識に一般がアクセスできるようにするか?
- ・2017年に出版された一般向け要約集
 - ⇒目的:包括的な形で、プロジェクトの背景を説明し、学術アンソロジーの成果を統合し、現代的視点を提供すること
 - ① スウェーデン国教会とサーミの関係にある問題点を理解してもらう
 - ② 歴史の中に共通項を見出す
- ・どのような方法をとるか
 - ・多様な学者でバラバラな物語を調整し、一貫性のある表現を作る
 - ① 共通の物語構造
 - ② 直線的な年表
 - ③ 一貫した歴史エージェントを用いる
 - ④ 「植民地主義」「エスニシティ」など共通した概念を用いる
 - ⑤ 「犠牲者」の例をエンパシーと愛着の様式へと移行させる(=個人化)

6. 他の知識の生成

・多様な知識体系へと転換:「全く異なる歴史的・文化的・メディア的風景へと広がり、収斂した」

- ① テレビ放送やラジオへのインタビュー、新聞での報道
- ② 教会、サーミの団体の雑誌:学術報告書と一般向け要約の紹介を行った
- ③ 学者の多くが公開講演、読書サークルへの参加、情報交換会、学会への参加
- ④ ブログ、ツイッター、フェイスブック

⇒一般市民向けに一部を再文脈化・再修正する

- ⑤ 映画化「サーミの血」:ビジュアル化

・歴史知識の委託先が、アカデミズムからアカデミズム外の個人へと変化

7. 終わりに

・和解のプロセス:複合的なプロセス、有機体としての教育プロジェクト

第1段階:歴史問題の定式化

第2段階:科学的知識の構築

第3段階:一般の人々がアクセスし、伝達可能な形で再構築させる

⇒異なる主体、異なるメディアによって、再調停が行われる

・知識の階層化の問題:科学的知識がどのように重要なカギを持っているか。科学的知識が高いものであるとすることでの問題性は何か。